
World end wars ~終焉へと続く戦い~

紅蓮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

World end wars 〜終焉へと続く戦い〜

【Nコード】

N8081Z

【作者名】

紅蓮

【あらすじ】

平和を迎えるはずだった世界は、一つの国の反乱により絶望的な状況に立たされた。

物語はそんな世界で生きるある部隊を視点に進みます。

初投稿作品なので、文章力は無いですがよろしくお願いします

プロローグ

（プロローグ）

2025年 世界では第三次世界大戦が始まるうとしている・・・

2015年 国連の会議で核保有国は全ての核兵器を廃止する事が決まり、世界から核の脅威は無くなった。

そして世界から戦争を無くす為の組織、世界連盟が設立された。世界連盟への参加は全ての国が承諾し、世界連盟の働きもあり徐々に戦争、紛争は終結を迎えていき世界から戦争が無くなると誰もが信じていた。

しかし、平穏は長くは続かなかつた。2023年に北朝鮮が核ミサイルを製造している事が北朝鮮からの亡命者により知らされ発覚した。世界連盟は核ミサイルの製造の中止を求めが北朝鮮は呼びかけを無視し、世界連盟を脱退した。北朝鮮の核ミサイル製造の事は機密事項にするはずが情報が漏洩し、全世界に知れ渡った。

世界が不安と恐怖に包まれて一年・・・
2024年 事態は急変した。北朝鮮がロシア、中国、日本に世界連盟を脱退し、協力するよう要求したのである。当然、各国は協力を反対したが北朝鮮は「協力を拒否すればミサイルでの攻撃を考える」

と発表した。ロシア、中国、日本はすぐに緊急の会議を開き、対策チームを結成してミサイル発射場所を特定しようとしたが一カ月に及ぶ調査は虚しく、
発射場所は特定できず対策チームは解散した。

そして半年に一度行われる世界連盟加盟国代表が集まる会議でロシア、中国は世界連盟を脱退し、北朝鮮に協力することを発表した。一方、日本は協力を拒否し、核攻撃を恐れた日本の首相はアメリカ大統領との会談で完成間近の移動要塞型人工島「インプレイスフォート」をアメリカ領海内に移動させ、そこに国民を避難させる事を決定した。その後、インプレイスフォートは急ピッチで完成され、日本政府はすぐに国民を避難させる為に動き出した。

しかし、日本政府が動き出すのは遅すぎた。国民の避難完了前に北朝鮮は無慈悲にもミサイル攻撃を開始し、日本は国土と国民の20%、首相を失う事となった。後にこの悲劇は「無慈悲なる鉄の雨」と呼ばれるようになった。

そして、現在・・・2025年、世界は緊迫した状況に置かれている。

北朝鮮、中国、ロシアは正式に同盟を結んだ事を発表し、その名をD・P・P連合と名乗った。世界連盟でも動きがあり、日本は残った国民をインプレイスフォートに移住させ、インプレイスフォートを新日本と発表した。

そして、日本、アメリカ、EUは同盟を結び、J・E・U連盟を設立。二つの連合軍は着々と戦争に備えて準備を進めている。

そう、第三次世界大戦への準備を・・・

Episode 1 「辞令」(前書き)

不定期更新にするつもりなのでよろしくお願いします。

Episode 1 「辞令」

街は炎に包まれ、建物は倒壊しありとあらゆるものが原形を留めていない。そんな街の中心に一人の男が立っていた。背丈は高く、細身で髪の色は鮮やかな黒色をしていて真っ直ぐに髪を下ろしている。

「……ここはどこだ？」

黒髪の男は全く状況を掴めていない様子だったが男はすぐに自分が危険な場所に居ることに気づく。男の周りに人が大勢倒れていたからである。男は近くに倒れている女性に近づき、体を揺さぶってみたが反応は無く、今度は怪我をしていないか確かめる為に女性の体を仰向けにした。女性の状態を見た男は驚き一歩後ろに下がった。男が驚いた理由は女性の顔が焼けただけ、腹部に大きくえぐられて内臓が飛び出ていたからだだった。

「死体の損傷が激しいな。この傷は……爆発に巻き込まれない限りできないな。」

男がその場から離れようとした時だった。遠くから爆発が起き、耳を塞ぎたくなるほどの爆音が響いた。

「一体何が起きてるんだ？」

男は混乱していたがすぐに自分が危険が迫っていることに気が付いた。空を見上げると何かが落ちてくるのが視界に映っていて、逆光のせいで見づらかったが男にはすぐにそれが何かわかった。

「ミサイル！？くそ、もう間に合わないじゃねえかよ……」

男は逃げても間に合わないと悟り、覚悟を決め静かに目を閉じた。

「おゝい、起きろ。点呼に遅れるぜ、坊や。」

聞き覚えのある声に起こされ、目を開けると目の前には金髪でオールバックの男が俺の顔を覗き込んでいた。

「ん？もうそんな時間か。」

男はすぐに起き上がり、軍服に身を包み身支度を始めていた。

「愁恋、うなされてたようだけど悪夢でも見てたか？あっわかったぞ、夢の中で軍曹の歌でもきかされてたんだろ。」

金髪の男は笑顔でそう言いながら、右手の親指を立て白い歯を輝かせていた。反対に愁恋は不機嫌そうな表情を浮かべながら身支度を終わらせていた。

「アレックス勘弁してくれ、そんなのを聞いたら泡を吹いて倒れちゃう。それと起きてすぐにお前のジョークは聞きたくない。」

「はあ……溜め息が出る。嫌な夢を見た次はアレックスのジョークか。全く朝からツイてないぜ。」

愁恋は苦笑しながらアレックスと部屋を出た。

午前9時 愁恋は射撃場で射撃訓練をしていて、何故か苛々している様子だった。

くそ、射撃は得意なほうなんだけどな、隣で口笛を吹いてるやつ
のせいで全く集中できない。

「アレックス、口笛がうるさくて全く集中できないんたが。」

「ふつ、口笛程度で集中力を切らすなんてさすが坊やだな、愁恋。」

アレックスは愁恋と話しながらも正確に的を撃ち抜いていた。現在、この基地でアレックスに射撃で勝てる者は誰一人居ない。アレックスは狙撃手としての能力が群を抜いて高く、通常なら観測手とペアになり、観測手に周囲の状況把握を任せて狙撃に専念するのだがそれを一人でこなし狙撃できるらしい。アレックスは1500m以上先まで狙撃ができるらしい。この距離まで狙撃できる狙撃手は凄腕でアレックスもその一人という事となる。

アレックスの挑発で愁恋は余計に苛々して結局、的に全く当たらず残念な結果となった。

正午 愁恋とアレックスは軍曹に呼び出されていた。

「なあ愁恋、お前軍曹に何かしたか？まさか、軍軍曹の奥さんに手を出したか？」

アレックスのジョークを聞き、愁恋は呆れた表情を浮かべていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8081z/>

World end wars ~終焉へと続く戦い~

2011年12月28日04時48分発行